

令和 5 年 9 月 13 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02630

研究課題名(和文) 全人の視座から情動知性を再考する：情動特性・生活領域に応じた情動面の賢さとは？

研究課題名(英文) Reconsideration on "Emotional Intelligence" from the whole-person perspective.

研究代表者

遠藤 利彦 (Endo, Toshihiko)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授

研究者番号：90242106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,490,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「情動知性」(EI)研究の現況を踏まえ、我々の心理社会的生活を豊かに支え得るEIとは何かについて実証的検討を行った。具体的には、個々人の情動特性に応じて適応値を有する「個別的EI」に関して、情動特性の個人差を測定するための日本語版尺度の開発を行った。また各種生活領域ごとに必要となる「領域特異的EI」に関して、殊に学校適応に関わるEIおよび非認知能力の発達およびそれに絡む要因の解明を、中学1年から高校3年にかけての縦断調査を通して試みた。さらに、能力型EIの一種たる表情認知能力に関して、マスク装着時の表情読み取りに関わる実験研究を、成人と幼児を対象に実施し、結果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

個別的EI研究において重要ツールとなる日本語版情動特性尺度を開発し得たことは、今後の日本におけるEIおよび感情心理学研究の新たな展開を可能ならしめるものと言える。また、EIおよび非認知能力の発達に関して、青年期前期から中期にかけて6年に亘る縦断研究を実施し得たことは、日本の児童生徒の心理社会的適応性の実態を知る上で意味ある基礎的データを得ることができたと評価できる。加えて、コロナ禍の影響が様々に議論される中、マスク装着時の表情読み取りの実際を成人と子どもを対象に把握できたことは、マスクがいかに我々の日常的コミュニケーションに影響を及ぼしたかを正当に評価・検証するための価値ある一証左となろう。

研究成果の概要(英文)：Based on the current status of research on Emotional Intelligence (EI), this study empirically examined what EI is that can support our psychosocial lives in a rich manner. Specifically, we developed a Japanese version of a scale to measure individual differences in emotional characteristics of personalized EI, which has adaptive value according to each person's emotional characteristics. In addition, we attempted to elucidate the development of domain-specific EI, which is necessary for each area of life, especially EI and non-cognitive abilities related to school adjustment, and the factors related to them, through a longitudinal survey from the first year of junior high school to the third year of high school. In addition, an experimental study on facial expression recognition ability, a type of ability-type EI, was conducted on adults and young children to obtain results related to the reading of facial expressions while wearing a mask.

研究分野：発達心理学・感情心理学

キーワード：情動知性(EI) 個別的情動知性(EI) 領域特異的情動知性(EI) 感情特性尺度 感情経験 学校適応 表情読み取り

1. 研究開始当初の背景

Salovey & Mayer (1990)によって提示された情動知性(Emotional Intelligence : EI)概念は、元来「情動について判断する能力や思考を高める情動の能力であり、正確な情動知覚、思考を助ける情動へのアクセスやその生起、情動に関する知識の理解、情動的・知的な成長を促進するために思慮深く情動を制御する能力」と定義されている(Mayer et al., 2004)。Mayer (2006)はEI概念誕生の背景として、1970年頃に情動研究領域において情動の機能性や有用性が示される一方で、知能研究分野でも認知的側面に限定されていた知能の範囲を広げる試みが起こったことなどから、それまで没交渉だった知能研究と情動研究の間に徐々に架橋の試みが生じてきたことを指摘している。彼らの言に従うならば、EIは本来、情動の機能性を個人のコンピテンスの面から積極的に捉えることができ、また知能研究が課題としていた「人間の知」の拡がりについての考察を押し進め得る重要な新概念として提唱されたものということになる。

EIはその後、サイエンスライターのGoleman(1995)によって一般向け書籍の中で紹介され、広く全世界的に社会全般において人口に膾炙するに至るが、逆に学術的厳密性を欠いた実践的応用ばかりが横行することになり、結果的にEIに関わる基礎的な学術研究の進行が妨げられることになったことが指摘されている(Matthews et al., 2012)。また、批判はEI提唱者のMayerらにも向けられ、特に情動そのものの研究に携わってきた者から、4枝モデルと呼ばれるMayerらのEIモデルは、概念提唱時に想定していたはずの情動本来の性質や機能性を軽視しているなどと様々に論難されるに至っている。しかし、情動そのものの研究を手がけてきた研究者は、現在流布しているEI概念やそれに関わる研究について鋭い批判を向ける一方で、その潜在的意義の大きさも認識しており、EIという枠組みをもって情動に関わる従来の諸概念を抜本的かつ包括的に捉え直すことが可能なのではないかと期待する向きもあったようである(Zeidner et al., 2009)。こうした期待や実社会への影響力の大きさを考えると、EI概念は、真摯な学術研究の俎上に再度置き直されて然るべきものと把握された。そうした認識の下、本研究では、今一度原点に立ち返り、真に我々の生活を豊かにし得る本来の意味でのEIとはいかなるものであるのか、その問いに関わる精細な理論的再吟味とその実証的検討を企図したのである。真に人の日常生活における適応やwell-beingに資するものとしてEIを把握し直すならば、現行のEI研究には看過し難い以下2種の問題点があると考えられた。

〔問題点1〕情動特性の個人差を考慮していない。元来、情動特性には広汎な個人差があり、本来、そのことからすれば、個々人は自身の有する情動特性に応じてそれぞれ異種個別のEIを備えてこそ心理社会的適応性やwell-being等を最大化し得るものと考えられるが、従来の研究の多くは、それに対する注視を相対的に怠ってきた。

〔問題点2〕適応の対象となる状況・領域の特異性を考慮していない。従来のEI研究は、適応の対象たる状況・領域を度外視し、暗黙裡に通状況・領域的EIばかりを問題にしてきたと言え、職業、家庭生活、教育などの各領域において特異的に必要となるEIを問うてこなかった。

この2つの点を踏まえ、本研究は、情動特性の個人差を踏まえた個別のEIと領域に応じた領域特異的EIに対して理論的および実証的検討を行う必要性を強く訴え、現実的な意味で真に我々の日常生活の適応性を分ける心理学的要因とは何かということの解明を目指した。

2. 研究の目的

本研究は、特にその概念の理論的整合性や実践的応用において、ある種閉塞状況に在るとおぼしき「情動知性」(Emotional Intelligence : EI)研究の現況を踏まえ、真に我々の心理社会的生活を豊かに支え得るEIとは何かについて原点に立ち戻っての再吟味を企図した。具体的には個々人の情動特性に広汎な分散が存在することから本来その個人差に応じた「個別的EI」を問わなければならないこと、また各種生活領域において適応の鍵となるEIが異なる可能性があることから「領域特異的EI」を審らかにしなければならないという理論的仮定の下で、それらに関わる文献研究[以下、研究(1)]と実証的検討を試みた。

当初、「個別的EI」に関しては、個々人の情動特性に応じてどのようなEI関連のコンピテンスを有しているかに関して、尺度の開発・整理とそれを用いた実証的検討(情動特性と各種EIの心理社会的適応性に及ぼす交互作用効果の検討)を実施する予定であったが、コロナ禍の状況の中で計画していた調査の実施が大幅に遅れ、結果的に情動特性の個人差を把握するためのDifferential Emotions Scale (DES: 個別感情尺度)尺度の日本語版の開発とそれを用いた予備的検証に止まった[以下、研究(5)]。

「領域特異的EI」に関しては、当初、家庭での養育、保育現場、学校教育現場という場における特異的EIの解明を目指していたが、やはりコロナ禍の状況において、家庭養育と保育現場に関しては、協力者の同意を得て参加を募ること自体が困難となり、結果的に、協力が得られた中学・高校の学校教育現場を対象に、殊に学校適応に関わるEIおよびそれに関連する非認知能力の発達およびそれに絡む要因の解明を目差し、中学1年から高校3年にかけての縦断調査のみ実施することができた。そこではEIと学校における感情経験が時間軸上においてどのような

影響し合い、学校での心理社会的適応性を規定することになるかに関して分析を行うことを主目的に据えた[以下、研究(4)]。

なお、コロナ禍の状況にあって計画を大きく変更し、コロナ禍の不自然に制約された環境下において、EI が密接に関連するとおぼしきマスク装着時の表情読み取りに関わる実験的な研究を実施することとした。元来、表情認知は、能力型 EI の 1 つとして、国内外で様々な研究が蓄積されてきたと言えるが、顔下半分の各種表情筋が隠れて見えなくなることによって、特にどのような種類の感情表出の認知に影響が及ぶかに関しては、証左がきわめて少ないことが指摘できる。6 基本感情(幸福・悲しみ・怒り・恐れ・嫌悪・驚き)に関して、独自に表情刺激を作成した上で、成人と幼児を対象にした表情読み取り評定の調査を実施し、マスク装着時における表情の読み取りの実態を探ることとした[以下、研究(2)(3)]。

3. 研究の方法

(1)

EI 及び情動経験・情動に関する認知に関わる文献を収集・検討し、情動研究を通じた情動知性研究の可能性について考察を行った。

(2)

20 - 60 代の成人 414 名を対象として、マスクをつけた顔写真を含む表情画像(モデル男女 6 名の怒り(開口・閉口)・嫌悪(開口・閉口)・恐れ・悲しみ・幸福・驚き・無表情)に対する読み取りについて web 調査を行い、表情認知にマスク有無・既存尺度によって測定された EI 得点・情動経験得点が与える影響について検討した。

(3)

北海道内の幼稚園 1 園に通う幼児 33 名を対象に、マスクをつけた表情画像の感情読み取り評定調査を行った。使用した刺激は成人と同じもののうち、モデル 2 名の怒り・喜び・悲しみ・恐れの 4 感情の表情画像を使用した。なお成人と異なり幼児が参加者となるため、幼児の調査参加負担を考慮し、全部で 16 枚の表情写真のみを使用した。

(4)

都内の中高一貫女子校 1 校に所属する中学校 1 年生から高校 3 年生を対象に、2018 年~2023 年の 1 - 3 月に年 1 回、6 時点の質問紙調査を実施した。調査内容としては、情動知性をはじめとした非認知能力の諸変数、感情経験や部活動、行事への関与に関わる諸変数の測定を行った。

(5)

個別感情を測定する Differential Emotions Scale (DES: 個別感情尺度) 尺度の日本語訳版尺度開発のため、2018 年から翻訳作業を行い、2019 年-2023 年にかけて項目選定および妥当性の検討のための質問紙調査を行った。

4. 研究成果

(1)

検討した文献から情動研究の知見を十分に踏まえた EI 研究が不可欠であるという考察を行い、それをもとにした発案によるシンポジウムを開催した。「情動知性 どう捉え、いかに育むか」(日本心理学会第 81 回大会)では、EI 研究の中でも発達の側面に焦点をあて、子どもの EI をどのように捉える(概念化・測定する)かや、EI がいかに育まれるのかについての話題提供を揃え議論を行った。「育てるものの、情(へ)の知性 領域特異的情動知性の提案へ向けて」(日本発達心理学会第 29 回大会)では、EI を領域別に検討することの意義を確認した上で、養育・保育領域に焦点を当て、養育者・保育者自身の情動や EI および子どもの EI をはぐくむ養育・保育に関する話題提供を揃え議論を行った。

(2)

マスクの有無によって表情読み取り評定に違いがあるか検討するため、表情読み取り正答枚数および回答への確信度について、マスクの有無(2) × 感情の種類(9)の参加者内二要因分散分析を行った。分析の結果、読み取り評定についてはマスク有無と感情の種類の主効果及び交互作用効果が有意となった(図 1)。その後の検定により、怒り(開口・閉口)・嫌悪(開口)・悲しみ・無表情・驚きにおいてマスク有無の単純主効果が有意となったが、正答数がマスクあり < マスクなしだったのは、怒り・嫌悪・悲しみ表情で、無表情と驚き表情ではマスクありの画像の方が正答しやすいという結果となった。また、確信度に関しても交互作用効果が有意に見られ、すべての表情においてマスク有無の単純主効果が有意となった。ただし、これについても怒り・嫌悪・恐れ・悲しみがマスクあり < なしで確信に差があったのに対し、幸せ・無表情・驚きに関してはマスクがあった方が自身の読み取りについてより高く確信を持つという結果になった。マスクがあることで読み取りがより正確になったり、確信度が高まったりする表情があることが

示唆されたわけであるが、これは対象となる表情がどのような筋肉の動きによって特徴づけられるかが影響していると考えられる。驚きや幸福のように、顔の上半分に多く変化がでる表情については、マスクで下半分が隠されることでその特徴がより強調され、読み取りが容易になる可能性がある。コロナ禍におけるマスク着用によって、表情認知を含む情動的コミュニケーションが阻害されることが懸念されてきたが、すべての表情が読み取りにくくなるわけではなく、表情によってはより理解しやすくなることが示唆された。この結果は日本発達心理学会にて発表を行った

また、本人の情動経験との関わりについて分析したところ、日常場面において主観的情動を多く経験している人ほど悲しみ表情の読み取りが正確になることが示された一方で、既存のEI尺度によって測定されたEI得点は表情の読み取りに対して影響を与えていないことが明らかとなった。情動に関する能力であるはずの表情認知に既存のEI得点が影響しないことは情動研究者から指摘されることがあり、これまでのEI測定や概念について再検討するべきことが確認されたといえよう。これらについては今後、国内学会で発表予定である。

(3)

マスクの有無によって表情読み取り評定に違いがあるか検討するため、表情読み取り正答枚数について、マスクの有無(2) × 感情の種類(4)の参加者内二要因分散分析を行った。分析の結果、表情の主効果と交互作用が有意だったが、マスクの有無の主効果は有意ではなく、幼児はマスクがあっても表情読み取りに有意な差がないことが示された(図2)。またその後の検定では、恐れ表情のみマスク有無の単純主効果が認められ、マスクありの表情の方が正答枚数の平均値が高かった。成人マスク表情調査でも恐れ表情の読み取り正答枚数は低く、幼児でも同じような結果が得られた。本調査結果は国内学会にて発表予定である。コロナ禍において、子どものコミュニケーションでの表情読み取り能力への影響が懸念されていたが、実際にはマスク有りの表情写真の方が読み取り正答枚数が高いという結果は示されなかった。コロナ禍における子どものEIに関わる能力を示したという点で学術的にも実践的にも意義のある知見を得られたといえる。

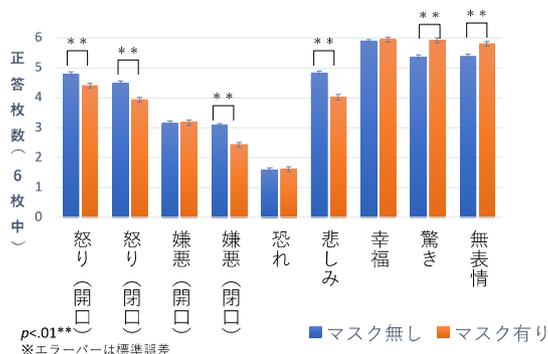


図1. 成人を対象とした表情・マスク有無別の正答数の平均値

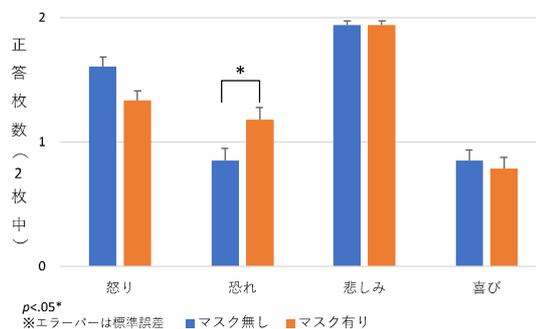


図2. 幼児を対象とした表情・マスク有無別の正答数の平均値

(4)

情動知性と感情経験との関連を検討するため、交差遅延モデルを用いて分析を行った結果、まず、情動知性と感情経験ともに、年度をまたいで、ある程度一貫した個人の特性的な側面があることが明らかとなった。また、生徒のポジティブな感情経験が情動知性を促進し、ネガティブな感情経験が情動知性を抑制するという側面、そして、情動知性が高いことでポジティブな感情経験が増え、情動知性が高いことでネガティブな感情経験が減るといった側面の双方向の関係が見られることが示唆された。本調査では中学・高校6年間の縦断データという、国内の青年期のEI発達の軌跡を追う貴重なデータを獲得することができた。本調査結果は日本発達心理学会にて発表を行った。

(5)

まず2度の翻訳作業を行い、日本語訳の項目群を作成した。その上で作成した日本語版項目群から、一般の日本国籍の成人に馴染みのない表現となっている項目がないか確認を行った。項目選定後に再度調査を行い、因子構造を確認した。今後は構成概念妥当性を検証し、信頼性・妥当性の確認を行う予定である。DES尺度は複数のネガティブ感情・ポジティブ感情の個人差を一括で測定可能な尺度であり、今後信頼性・妥当性が確認され、研究で利用できるようになれば本邦における感情研究の発展を促し、感情研究を通じたEI研究にも資すると思われる。現在計画中の信頼性・妥当性検証調査のデータ獲得次第、国内学術論文雑誌への投稿を目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Nakatani, H., Nonaka, Y., Muto, S., Asano, M., Fujimura, T., Nakai, T., & Okanoya, K.	4. 巻 14
2. 論文標題 Trait respect is linked to reduced gray matter volume in the anterior temporal lobe	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Human Neuroscience	6. 最初と最後の頁 344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fnhum.2020.00344	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Kawamoto, T., Kubota, K. A., Sakakibara, R., Muto, S., Tonegawa, A., Komatsu, S., & Endo, T.	4. 巻 171
2. 論文標題 The General Factor of Personality (GFP), trait emotional intelligence, and problem behaviors in Japanese teens	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 110480
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2020.110480	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 久保田 (河本) 愛子	4. 巻 29
2. 論文標題 中学・高校での学校行事体験が大学生活に及ぼす長期的効果：集団社会化理論の視座からの回顧的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 則近千尋・唐音啓・遠藤利彦	4. 巻 60
2. 論文標題 幼児期における非認知能力プログラムの近年の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 117-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 163
2. 論文標題 「非認知」の中核なる感情：それが発達にもたらすもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達（ミネルヴァ書房）	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 20(3)
2. 論文標題 「情の理」論：感情の中に潜む合理的なもの.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 262-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawamoto Tetsuya & Endo Toshihiko	4. 巻 141
2. 論文標題 Sources of variances in personality change during adolescence	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 182-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakakibara Ryota & Ishii Yu	4. 巻 17
2. 論文標題 Examination on how emotion regulation mediates the relationship between future time perspective and well-being: a counter-evidence to the socioemotional selectivity theory	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 European Journal of Ageing	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10433-019-00522-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田（河本）愛子	4. 巻 28
2. 論文標題 被教育体験としての学校行事の意味の検討：中学・高校教師を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本特別活動学会	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松佐穂子	4. 巻 42
2. 論文標題 大学におけるEQ教育の効果とその持続性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 徳山大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kawamoto Tetsuya, Endo Toshihiko	4. 巻 141
2. 論文標題 Sources of variances in personality change during adolescence	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 182 ~ 187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2019.01.018	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Dunkel Curtis S., van der Linden Dimitri, Kawamoto Tetsuya	4. 巻 28
2. 論文標題 Early childhood social responsiveness predicts the general factor of personality in early adolescence	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Infant and Child Development	6. 最初と最後の頁 e2123 ~ e2123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/icd.2123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Sugawara Daichi、Muto Sera、Sugie Masashi	4. 巻 89
2. 論文標題 The conceptual structure of positive emotions in Japanese university and graduate students	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology	6. 最初と最後の頁 479 ~ 489
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.89.17049	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川本 哲也	4. 巻 30
2. 論文標題 青年は「なぜ」自己破壊的行動を行うのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青年心理学研究	6. 最初と最後の頁 53 ~ 57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20688/jisyap.30.1_53	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 利彦	4. 巻 57
2. 論文標題 「学力の評価と測定をめぐって」: 「非認知」なるものの発達と教育: 殊に学力形成との関わりにおいて.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育心理学年報(日本教育心理学会)	6. 最初と最後の頁 220 ~ 225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 利彦	4. 巻 198
2. 論文標題 アタッチメント理論における基点と現代的展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 1 ~ 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 利彦	4. 巻 41
2. 論文標題 赤ちゃんにつながる：アタッチメントが心身発達に及ぼす影響。小児看護，	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小児看護	6. 最初と最後の頁 244～249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河本 愛子	4. 巻 27
2. 論文標題 課外活動集団内での同化・差異化尺度作成の試み：集団社会化理論に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 73～76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 利彦	4. 巻 153
2. 論文標題 アタッチメントが拓く生涯発達。	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達（ミネルヴァ書房）	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 利彦	4. 巻 83
2. 論文標題 アタッチメント理論から見る子どもの育ちと家庭。	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界の児童と母性（資生堂社会福祉事業財団）	6. 最初と最後の頁 7-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawamoto, T., Van der Linden, D., & Dunkel, C. S.	4. 巻 119
2. 論文標題 The General Factor of Personality (GFP) and moral foundations.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2017.06.043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小松佐穂子・岡野啓介・石川英樹	4. 巻 40
2. 論文標題 教育効果測定のためのEQ質問紙の開発：信頼性および妥当性の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 徳山大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 37-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 198
2. 論文標題 アタッチメント理論の基点と現代的展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学 (日本評論社)	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 83
2. 論文標題 アタッチメント理論から見る子どもの育ちと家庭	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界の児童と母性 (資生堂社会福祉事業財団)	6. 最初と最後の頁 7-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 48
2. 論文標題 アタッチメント理論を概括する.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 こころと社会(日本精神衛生会)	6. 最初と最後の頁 84-88
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 41
2. 論文標題 赤ちゃんとながる:アタッチメントが心身発達に及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小児看護, 41, 244-249.	6. 最初と最後の頁 244-249
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計40件(うち招待講演 7件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 遠藤利彦
2. 発表標題 解決不可能なパラドクスとしての虐待とCOSPの可能性
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術集会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 遠藤利彦・篠原郁子・北川恵・実藤和佳子・山下洋
2. 発表標題 発達の予兆を読む - 親子の関係性から占う赤ちゃんの未来 -
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第20回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 利根川明子・久保田（河本）愛子・則近千尋・石井佑可子・小松佐穂子・漆紫穂子・遠藤利彦
2. 発表標題 中・高校生の感情経験と感情知性の相互関係：3時点の縦断データを用いた検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 則近千尋・利根川明子・石井佑可子・小松佐穂子・遠藤利彦
2. 発表標題 情動刺激画像の作成および複数情動を用いた多面的な情動評定
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sera Muto
2. 発表標題 How the conceptualization of feelings can be a shortcut to the integration of the component process model and the psychological construction approach
3. 学会等名 2020 SAS (Society for Affective Science) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠原郁子, 石井佑可子, 武藤世良, 久保田（河本）愛子, 利根川明子, 遠藤利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの教育と展望（2） 学校要因と家庭要因による影響の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榊原 良太, 石井 悠, 久保田(河本)愛子
2. 発表標題 日本語版エウダイモニック・ウェルビーイング尺度の作成
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤利彦
2. 発表標題 養護と教育の表裏一体性
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤利彦
2. 発表標題 関係性の赤ちゃん学
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第19回学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 利根川 明子・久保田(河本) 愛子・小松 佐穂子・漆 紫穂子・遠藤 利彦
2. 発表標題 生徒の感情特性と感情知性の相互関係の検討 中高生を対象とした縦断データを用いた検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西田 季里・久保田(河本) 愛子・利根川 明子・石井 悠・遠藤 利彦
2. 発表標題 保育園年中・年長児の自己効力感，有能感，内発的動機づけの測定 ある保育園のサマーキャンプ効果検証調査から
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤 利彦
2. 発表標題 授業改善 - 「排情主義」から「活情主義」へ -
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川本哲也・安藤寿康・敷島千鶴・中村 聖・遠藤利彦
2. 発表標題 行動遺伝学から見る認知的・非認知的能力の発達
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 利根川明子・石井佑可子・榊原良太・武藤世良・川本哲也・河本愛子・遠藤利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの教育と展望
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井佑可子・利根川明子・榊原良太・川本哲也・武藤世良・遠藤利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの教育と展望(2)
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤 利彦
2. 発表標題 理論と実践の間：何に依拠して何を支援するかをめぐるいくつかの問い
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本学・今井啓道・佐藤顕光・五十嵐薫・館正弘
2. 発表標題 被虐待経験を有する母親への心理社会的支援
3. 学会等名 第42回日本口蓋裂学会総会・学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kawamoto Tetsuya
2. 発表標題 Relation between trait emotional intelligence and household income: Moderation effect of Machiavellianism.
3. 学会等名 European Conference on Personality 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 特性尊敬関連感情尺度の修正版作成の試み
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河本 愛子
2. 発表標題 小学校における運動会での傾倒体験と心理的適応：その効果の大きさは担任教師の性格によって異なるのか
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤寿康・酒井 厚・野寄茉莉・菅原ますみ・川本哲也・豊田峻輔
2. 発表標題 双生児による研究の諸相 発達研究への多様な可能性
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会（ラウンドテーブル）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤寿康・藤澤啓子・川本哲也・鈴木国威・本多智佳・滝沢龍
2. 発表標題 発達の行動遺伝学の現在 児童期・青年期・成人期の双生児コホート研究
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会（シンポジウム）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井佑可子・小松佐穂子・遠藤利彦・武藤世良・利根川明子
2. 発表標題 情動知性 どう捉え, いかに着むか
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井佑可子・蒲谷慎介・松本学・石井悠・遠藤利彦
2. 発表標題 育てる者の, 情(へ)の知性 領域特異的情動知性の提案へ向けて
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会(シンポジウム)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川本哲也
2. 発表標題 一般パーソナリティ因子(GFP)とソシオセクシャリティ
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会(ポスター発表)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川本哲也
2. 発表標題 一般パーソナリティ因子(GFP)と配偶者選択 Social Effectiveness Hypothesisの検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第26回大会(ポスター発表)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小松佐穂子
2. 発表標題 大学における感情知性 (EI) 教育効果の検討
3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会 (ポスター発表)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤世良
2. 発表標題 現代日本の大学生における尊敬関連感情の生起要因と社会的機能
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会 (小講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤世良・白井真理子
2. 発表標題 今,改めて問う『感情とは何か』
3. 学会等名 日本感情心理学会第25回大会 (プレカンファレンス)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤世良
2. 発表標題 尊敬による「自己ピグマリオン過程」とはいかなるプロセスなのか 大学生を対象とした短期縦断的検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第25回大会 (口頭発表)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤世良
2. 発表標題 特性尊敬関連感情尺度（青年期後期用）短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会（ポスター発表）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤世良
2. 発表標題 日本の親は子どもの尊敬感情をどの程度奨励しているのか
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会（ポスター発表）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下司忠大・増井啓太・田村紋女・喜入 暁・川本哲也・阿部晋吾
2. 発表標題 Dark Triad と対人関係 「ダークな人」の戦略性・適応性
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第26回大会（シンポジウム）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 利根川明子・河本愛子・川本哲也・武藤世良・遠藤利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの発達と展望
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会（シンポジウム）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤世良
2. 発表標題 ロールモデル再考 尊敬の感情的機能とは
3. 学会等名 ポジティブ心理学・看護学研究会 ポジティブ心理学を看護に応用する (招待講演)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kawamoto, T., Miyake, Y., Tanaka, K., Fukushima, W., Kiyohara, C., Sasaki, S., Hirota, Y., Nagai, M., Nakamura, Y., & Fukuoka Kinki Parkinson's Disease Study Group
2. 発表標題 Stress and Parkinson's disease: A case-control study in Japan.
3. 学会等名 The 21st International Epidemiological Association World Congress of Epidemiology (ポスター発表)(国際学会)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawamoto, T.
2. 発表標題 Longitudinal relations between life history traits and psychosomatic health in Japanese adult.
3. 学会等名 The International Society for the Study of Individual Differences 2017 Conference (口頭発表)(国際学会)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawamoto, T.
2. 発表標題 Relation between personality traits, life history strategy, and health problems in Japanese adults.
3. 学会等名 The International Society for the Study of Individual Differences 2017 Conference (ポスター発表)(国際学会)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawamoto, T.
2. 発表標題 Associations between life history strategy and moral foundations in Japanese adults.
3. 学会等名 The International Society for the Study of Individual Differences 2017 Conference (ポスター発表) (国際学会) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤利彦
2. 発表標題 自己と社会性の揺籃としてのアタッチメント
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第17回学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 秋田喜代美・遠藤利彦・小玉重夫 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 946
3. 書名 発達保育実践政策学研究のフロントランナー	

1. 著者名 滝川一廣・内海新祐 (編著)・遠藤利彦 (分担執筆)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 240
3. 書名 子ども虐待を考えるために知っておくべきこと	

1. 著者名 秋山美紀・島井哲志・前野隆司（編著）・武藤世良（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 352
3. 書名 看護のためのポジティブ心理学	

1. 著者名 川島大輔・松本学・徳田治子・保坂裕子（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 多様な人生のかたちに迫る発達心理学	

1. 著者名 社会福祉学習双書編集委員会・遠藤利彦（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 全国社会福祉協議会	5. 総ページ数 321
3. 書名 社会福祉学習双書11：心理学と心理的支援	

1. 著者名 一般社団法人日本赤ちゃん学協会、小椋 たみ子、遠藤 利彦、乙部 貴幸	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 141
3. 書名 言葉・非認知的な心・学ぶ力	

1. 著者名 秋田喜代美、遠藤利彦、渡辺はま、多賀徹太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 232
3. 書名 乳幼児の発達と保育	

1. 著者名 日本感情心理学会、内山 伊知郎、中村 真、武藤 世良、大平 英樹、樋口 匡貴、石川 隆行、榊原 良太、有光 興記、澤田 匡人、湯川 進太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 472
3. 書名 感情心理学ハンドブック	

1. 著者名 荒木 寿友、藤澤 文、武藤世良、川本哲也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 道徳教育はこうすれば もっと おもしろい	

1. 著者名 西村純一・平野 真理・高橋翠・小松佐穂子・武藤世良・川本哲也・石井佑可子・榊原良太他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 156
3. 書名 生涯発達心理学	

1. 著者名 遠藤利彦・蒲谷楨介・本島優子他(著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 120
3. 書名 発達153：最新・アタッチメントからみる発達 養育・保育・臨床の場における“愛着”をめぐって	

1. 著者名 島義弘(編)・石井佑可子他(著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 サイエンス社	5. 総ページ数 221
3. 書名 パーソナリティと感情の心理学(ライブラリ心理学を学ぶ)	

1. 著者名 榊原良太(著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 180
3. 書名 感情のコントロールと心の健康	

1. 著者名 ステファン・G・ホフマン(著)・有光興記(監訳)・榊原良太・武藤世良他(訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 心の治療における感情 科学から臨床実践へ	

1. 著者名 武藤世良 (著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 436
3. 書名 尊敬関連感情の心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	本島 優子 (Motoshima Yuko) (10711294)	山形大学・地域教育文化学部・准教授 (11501)	
研究分担者	松本 学 (Matsumoto Manabu) (20507959)	共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授 (32303)	
研究分担者	武藤 世良 (Muto Sera) (30785895)	お茶の水女子大学・基幹研究院・講師 (12611)	
研究分担者	石井 佑可子 (Ishii Yukako) (40632576)	藤女子大学・文学部・准教授 (30105)	
研究分担者	小松 佐穂子 (Komatsu Sahoko) (50531703)	徳山大学・福祉情報学部・准教授 (35502)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榊原 良太 (Sakakibara Ryota) (80778910)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授 (17701)	
研究分担者	久保田 愛子 (Kubota Aiko) (90832907)	宇都宮大学・共同教育学部・助教 (12201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関